

# 近代日本における哲学的批評論の展開

—大西祝から戸坂潤へ—

郭 馳 洋

はじめに

1. 「批評」の成立と大西祝の批評論
2. 明治後期と大正期における文明批評・文化主義
3. 戸坂潤の批評論(1)——「文芸批評」から「科学的批評」へ
4. 戸坂潤の批評論(2)——批評と認識

おわりに

## はじめに

本論文は戸坂潤の批評論を明治・大正以来の「批評」言説を念頭に置きながら考察する試みである。従来の批評史研究では主として文学者とその作品に焦点が当てられ、批評史自体も文学史の一部門とされる傾向にある<sup>1</sup>。しかし文学の批評を批評史に対する唯一のアプローチにしてしまうと、「批評」のもつ豊かな可能性が矮小化されかねない。かつて柄谷行人が指摘したように、「批評」と「批判」の棲み分けに近代日本の知性史の盲点がある<sup>2</sup>。

そこで本論文は、批評を狭義での文芸批評に限定するのではなく、それを原理論的に捉え直しつつそのアクチュアリティを確保しようとした大西祝(1864-1900)<sup>3</sup>と戸坂潤(1900-1945)<sup>4</sup>、とりわけ後者の批評論に焦点を絞る。大西と戸坂はともに大学の哲学科

---

1 文学評論史としての批評史研究の労作は、戦前に土方定一『近代日本文学評論史』(西東書林、1936年)、戦後に吉田精一『近代文芸評論史<明治篇>』(至文堂、1975年)・同『近代文芸評論史<大正篇>』(至文堂、1980年)、野口武彦『日本近代批評のアンゲル』(青土社、1992年)などがある。

2 柄谷行人編『近代日本の批評 I』講談社、1997年、10頁。

3 大西祝の生涯・思想は平山洋『大西祝とその時代』(日本図書センター、1989年)に詳しい。

4 戸坂の思想的展開をその生涯とともに通時的に跡付けるものに平林康之『近代日本の思想家<10> 戸坂潤』(東京大学出版会、1960年)や、山田洸『戸坂潤とその時代』(花伝社、1990年)がある。従来の研究では戸坂を昭和前期の言論空間、とくに京都学派や唯物論者との関係において捉えるも

出身で、「批評」概念に理論的な反省を加え、そこにカント的な「批判」を読み込み、哲学的批評の在り方を探究した。つまり二人はいわゆる文芸批評家と異なる系統に属していた。しかもアカデミズムに閉じこもることなく、現実社会への並々ならぬ関心からジャーナリストティックな評論をたくさん執筆した。大西と戸坂は、近代日本の哲学者のなか最も批判精神を体現した者だと思われる<sup>5</sup>。

さて、論の展開としてまず「批評」の成立の背景を念頭に置きつつ、大西の批評論を取り上げる。次に、「批評」の課題を引き継いだ明治後期・大正期の「文明批評」・「文化主義」の思潮を簡単に整理する。最後にそれを批判的に受け止めた戸坂の批評論に光を当てる。こうした作業を通して批評論の系譜で戸坂を位置づけると同時に、これまでの文学中心の批評史を脱臼（dislocate）させ、もう一つの「批評」の水脈を提示したい<sup>6</sup>。

## 1. 「批評」の成立と大西祝の批評論<sup>7</sup>

### 1-1. 明治期における「批評」の確立

「批評」という漢語はむろん近代以前の文献にも見られるが、19世紀半ば以降それはcriticismの訳語としての性格を帯びるようになった。『英和对訳袖珍辞書』（1862）や『英華字典』（1866-1869）、ないしアカデミズムで大きな権威をもつ『哲学字彙』（1881）にこの点が確認できる。日本の場合、criticismを意味する「批評」として書かれたテキストは坪内逍遙（1859-1935）の小説『当世書生氣質』（1885-1886）を扱った高田半峰（1960-1938）の「当世書生氣質の批評」（1886）をもって嚆矢とする<sup>8</sup>。

---

のが多い。確かにそこでも「批評」はよく言及されるが、それを中心概念として論じ、しかも「近代日本の批評」という文脈で考察する研究は皆無に近い。

5 かつて山田洗は大西と戸坂を近代日本の理性を代表する人物と評価した（山田洗「近代日本における理性の態様」、『思想と現代』、1985年10月、74-84頁）。なお山田によれば、大西が直面していた、事実の認識から「道徳的理想」への跳躍の問題は、戸坂が追求していた道徳の科学的観念と文学的観念の統一の問題と同じく、倫理学における根本問題である（山田洗『日本社会主義の倫理思想』青木書店、1981年、36頁）。

6 ただし、本論文は「哲学」を新たな権威に仕立てるつもりではない。むしろ哲学と批評論を結びつけることによって、西田哲学を中心とする近代日本哲学史の叙述を相対化したい。

7 この部分の記述は、拙稿「明治中期における批判理論としての『批評』：大西祝の批評的思考を中心に」（『日本思想史学』50号、2018年、171-189頁）と重なるところがある、ということは断っておきたい。

8 近代日本における「批評」の成立に関しては主に野口武彦「煩悶、高揚、そして悲哀」（『批評空間』創刊号、1991年、39-51頁）、小森陽一「近代批評の出発」（『批評空間』創刊号、1991年、69-84頁）、木村直恵「<批評>の誕生」（『比較文学』45(0)号、2003年、7-22頁）、林正子「近代日本の評論における<批評>の成立」（稲生勝・津田雅夫ら編『文化的近代を問う』所収、文理閣、2004年）などを参照。

翻訳語の事情はさておき、「批評」というジャンルの実質的な形成は商業出版資本に支えられる近代ジャーナリズムという物的条件を必要としている。なぜなら「批評」が読者に読まれるためには自らも出版物の形態を取らなくてはならないからだ。出版業界が急成長を見せた1880年代後半、書評雑誌『出版月評』の創刊（1887）に象徴されるように、「批評」も流行り出しジャンルとして自立し始めた<sup>9</sup>。ただしその際、優れた内容をもつ作品が批評を引き起こしたことより、むしろまず大量の書物が生産されたため、「市場における仲買人」としての批評が要請される<sup>10</sup>。それに加わって、明治初期以来の欧化主義に反発した日本主義・国粹主義が台頭し、啓蒙思想、イギリス経験主義は社会進化論、ドイツ観念論に取って代われようとしていた最中だったゆえ、諸々の思想ないし文体の激しい闘ぎ合いが見られる。このような状況は当時の「批評」にも反映されている<sup>11</sup>。

## 1-2. 大西祝の「批評論」（1888）

若き大西祝はこうした「批評」の流行に違和感を覚え、その問題点を鋭く突いた。1888年5月、まだ帝国大学に在学していた大西は雑誌『国民之友』で「批評論」と題する論考を発表した。「批評」に関する最初の自己言及の一つ<sup>12</sup>と言われるこの文章は形式的に「創作と批評」、「批評の職分」、「批評の範囲」、「何を批評すべきか」、「我国の思想界」、「批評を要する者」、「通弁の誤謬」という7部分に分かれており、内容的にイギリスの詩人・批評家アーノルド（Matthew Arnold, 1822-1888）の『批評論集』における批評観に負うところが大きい<sup>13</sup>。まず、当時の「批評」ブームが大西の目にどう映じているかを見ておこう。

夫れ此一、二年間新聞雑誌の紙面を一変したる者にして、恐らくは批評の文字の上に出ずる者あらざるべし。小説の翻訳ある毎に、諸の新聞雑誌は之に多少の批評を下さざるはなし。（中略）毎月出版の雑誌にして批評を専門とする者さえあるに到れり。去れば此批評の流行に連れて身に速成の神験術を行い、一変して批評家となりすます者もあるならん。但だ彼等に向い問うて曰わん、何事を批評せんと欲するかと<sup>14</sup>。

新聞雑誌における「批評」の流行を実感した大西は「批評」のファッション化に乗じて批

9 「批評」の成立を活字印刷というメディアの発展と結び付けて考察する研究に前掲小森論文がある。

10 前掲小森論文。

11 前掲野口論文によれば、このときの批評には「時代の問題を千彙万篇的に引き受けたこと」、「きわめて自主主張的」であること、「いきおい論争的」であることという三つの特徴が見受けられる。

12 前掲小森論文。

13 大西の批評観とアーノルドの関係は佐藤善也『透谷、操山とマシュー・アーノルド』（近代文芸社、1997年）に詳しい。

14 大西祝「批評論」『国民之友』1888年5月。小坂国継編『大西祝選集Ⅱ 評論篇』（以下、『選集Ⅱ』と略称）岩波書店、2014年、36-37頁。

評家かのように振る舞う者の存在に気付き、彼らが一体何を批評しようとするかと疑問を禁じえない。この疑問はまた大西本人の批評観と関係している。

其欲する所、小説の訳書の出ずる度に之に数言の愛憎を呈せんとするに在る乎、寺子屋の文字にホゼクリ批評を下さんとするに在る乎。それも或は益あるならん、然れども是れ只だ批評の末端なるのみ、若し又其欲する所は筆を飛ばして政治、経済、詩文、小説、歴史、哲学の近著に悉皆搔撫の批評を下し猶お飽き足らずして数学の書物迄を品評せんとするに在る乎。（中略）然れども凡べて其種類の批評家は予が所謂の批評家にあらざるなり。我国文化の先導者たらんと欲するの批評家は宜しく活眼を開て今日の思想界を洞察せよ。善く其真相を看破し得る者は是れ予が所謂の批評家たることを得る者なり<sup>15</sup>。

大西は明らかに対象を選ばず何でも批評しようとする「批評家」の行為に盲目性を感じ取っている。この盲目性は、翻って言えば出版市場の動向にひたすら追従することである。大西からすれば、市場原理に従順的である限り、「今日の思想界」の真相を認識することはできず、「文化の先導者」たる真の批評家にはなれない。つまりアクチュアリティの把握が求められる。ちなみに、ここでの「文化」は大西がアーノルドの「culture」概念の訳語としてあてた「文華」に関連しており、「文明」概念と異質なものである<sup>16</sup>。

### 1-3. 「批評」における否定と普遍

大西の見方では、「今日の思想界」は中国思想、インド思想そして西洋思想が「文化の基礎」および「其動力」として共存するという様相を呈しており、批評家の最も力を注ぐべきものは新しく入ってきた西洋の思想なのだ。ただし西洋思想への重視は明治初期の欧化主義とは異質なものである。「今日の時代を知らんには之に超越せざる可らず、之に超越せんには先ず進歩せる西洋の思想に通ぜざる可らず。（中略）而して之を批評せざる可らず。此一語は以て我国今日の思想界の方針と為すに足るを信ず」<sup>17</sup> という叙述の示すように、「今日の時代」を認識するという目的は同時代の「超越」を要求しており、西洋思想の考究はあくまで「超越」のための手段である。つまり西洋の思想もいずれ批評を受けて止揚される。ここで「批評」が「超越」に繋がる点は興味深い。もっとも、「超越」という用語自体は乗り越えるべき対象の存在を示唆し、すでに否定性なるものを包含している。「批評」とその対象の間には否定的な距離が措定されていると言えよう。

このような超越性志向はそのまま批評方法論に表れる。大西は「批評」の手順について

---

15 同上、37頁。

16 清水均「近代日本における「文化」概念の成立(2)(1)」『聖学院大学論叢』29(1)、2016年、89-103頁。

17 『選集Ⅱ』、44頁。

ある種の二段階論を提起する。

然らば則ち批評家は如何の作用によりて文学的創作の真相を発見し得るや。今其作用を分析して二段となし得べし。第一、創作家と同情となること、第二、其創作家の所作を、我が有する所の最高の標準に照すこと是れなり。(中略)然れども一たび身を創作家の位地に置きし上は、復た翼を撃て理想的の土地に上り、最高の標準に照らして、其創作家の所作に、絶対的の批評を下さざる可らず。即ち一たびは近づき一度は遠かり、一度は親友、一たびは純全たる他人とならざる可らず<sup>18</sup>。

つまり、第一段階で創作家と同じ立場に立つのに対して、第二段階ではそこから離れ「理想的の土地」で「最高の標準」によって作品を批評する、言い換えれば作品の超越を目指す。「親友」から「他人」への移行もこの意味では否定のプロセスである。

ただし、いわゆる否定は創作にとって単に消極的なものではなく、むしろ来るべき創作との媒介作用を果たすものだ。否定の機能を持つ批評は「名作の後に不出るのみならず、又よく未来の名作を誘引するの力あり。(中略)往時を顧みるに止まらず、又将来を指揮するの力」を有している<sup>19</sup>。大西は文学の領域で創作家に「最高の勲章」を授けるのは批評家だと、創作の上に批評という審級を措いている<sup>20</sup>。

もっとも、「批評」がコミットするのは文学だけではない。大西はより広義での「批評」概念を考えている。

批評なるものは広く之を解すれば独り文学に限るにあらず。美術には美術の批評あり、哲学には哲学の批評あり、創作のある所批評あらざるはなし。且つ夫れ歴史は一種の批評に外ならず、或は国家の歴史、或は文学の歴史、或は學術の歴史、皆是れ既往の事実を批評する者と謂って可なり<sup>21</sup>。

創作がある限り批評も要請される。美術や哲学を創作と理解すれば、それぞれの批評がある。さらに興味深いことに、「歴史」も「既往の事実を批評する者」とされる——ここでの「歴史」は史実よりも歴史記述・歴史認識と理解したほうが適切だろう。このように、人間の知的営為に深く関わっている「批評」は、あらゆる分野と一定の距離を保ちつつもそれらを跨っている点から言うと、何らかの普遍なるものを志向しているのだ。一つの思想が「思想界の貨幣」——大西においてこれは「普遍」のメタファーにほかならないが——としての資格を獲得するためには、「批評」を通過しなければならない<sup>22</sup>。

「批評」のこの普遍性は、大西の「批評」思想の形成において重要な位置を占めたカン

18 同上、34-35頁。

19 同上、32頁。

20 同上、33頁。

21 同上、35頁。

22 同上、35-36頁。

ト哲学と関連している<sup>23</sup>。帝国大学で西洋哲学の専門知識を身につけた大西は、新カント派の哲学者ロッツェ（Hermann Lotze, 1817-1881）の影響を受けた、1887年から1892年にかけて哲学科の教鞭を執っていたブッセ（Ludwig Busse, 1862-1907）からカント哲学を教わった。アカデミー哲学の主流がドイツ観念論へと変わったことはその背景にある。大西もこの転換を自ら経験した当事者の一人であって、その大学院時代の指導教員になったのは、ドイツ留学から帰国した井上哲次郎（1855-1944）である。ただし大西は同志社英学校での経歴もあり、ドイツ観念論を受容しつつも自身の思想の「イギリス的」な部分を容易に切り捨てることはなかった。彼の「批評主義」も、アーノルドの批評観とカントの批判哲学両方を組み合わせたものである<sup>24</sup>。

「批評論」のおよそ一年後に発表された「方今思想界の要務」で『偏純的理性の評論』（『純粹理性批判』）の序文の一節が引かれている。

我等の時代は真に批評の時代なり。事々物々皆之を批評に付せざるを得ず。宗教は其神聖なるの故を以て、法度は其莊嚴なるの故を以て、動もすれば批評の外に立たんと欲すれども、若し果して其外に立ちたらんには吾人の宗教法度に対して疑訝を懐くに至らんも毫も不当のことと謂う可らず。又吾人の道理心は其如き宗教法度には真実の尊敬を与うることをせざるべし。蓋し吾人の道理心は其公明且正大なる試験を経たるものに非ずんば、之に真実の尊敬を与うることをせざるなり<sup>25</sup>。

「批評の時代」においてすべての物事は「批評」を受けべきで、宗教・法も例外ではない。いかなる権威も「批評」の前で相対化されざるを得ない。ここで「批評」はカント的な「批判」、理性の公然たる吟味（「道理心」の「公明且正大なる試験」）を意味している。したがって、「吾人の道理心」は「批評の尺度」となり、それに準拠し諸思想の価値を見定めることこそ「批評」の目的である<sup>26</sup>。「建設」を最終目標とする一方で「破壊的」という否定性を持つ批評を放棄すべきではない主張したのもこのためだ<sup>27</sup>。「批評」に媒介されないような「建設」に普遍的な価値は見出せない。

大西は商品としての出版物の質を判断すべきにも関わらず出版資本に踊らされる当時の「批評」に対抗すべく、同時代の「超越」を「批評」に課し、市場原理から独立した「最高の標準」を樹立しようとする。活字メディアを身体とする「批評」それ自体も一種の商

---

23 大西における「批評」とカント哲学の関係については御子柴善之「批評主義と世界市民的倫理学——大西祝研究のために」（『早稲田大学史記要』43号、2012年、29-52頁）、『『批判』の受容と大西祝』（『哲学世界』39号、2016年、1-14頁）を参照。

24 前掲平山著、117頁。

25 大西祝「方今思想界の要務」1889年4月。『選集Ⅱ』58頁。

26 同上、62頁。

27 同上、63、69頁。



品である点を考慮すると、大西の目論む「批評」の再生は簡単ではないが、彼の掲げた「批評」の課題は次世代の批評家によって様々な形で受け継がれていった。

## 2. 明治後期と大正期における文明批評・文化主義

大西以後の批評言説は明治後期・大正期、つまり1890年代後半から1920年代にかけて、やがて後に「文明批評」・「文化主義」と呼ばれる思潮を形成するに至った<sup>28</sup>。その意味でも大西の批評論は一つのメルクマールとして記憶されるべきだろう。実際のところ、東京専門学校における門下生の金子筑水（1870-1937）、島村抱月（1871-1918）、綱島梁川（1873-1907）はそれぞれ文芸評論家や思想・哲学の紹介者として活躍し、帝国大学哲学科での後輩であり後に「文化主義」を唱えた桑木巖翼（1874-1946）は哲学とりわけカント・新カント派研究と社会評論に携わっていた。

1900年前後、博文館発行の総合雑誌『太陽』を拠点に論壇で注目を浴びていた高山樗牛（1871-1902）は大西に次いで「批評」の必要性を前面に押し出し、かつ批評家というものを「文明批評家」という語で捉え直した最早の一人であった。彼は「我邦現今の文芸界に於ける批評家の本務」（1897）や「文明批評家としての文学者」（1901）などにおいて自身の批評観を披露している。かつて大西の講演に魅了された島崎藤村（1872-1943）は大西のことを「批評といふものを高い位置へ引上げた最初の人」と評価し、その後に生起した「高い意味の批評」を行った者として樗牛の名前を挙げた<sup>29</sup>。

ところが、「批評」重視のスタンスを共有しているものの、時代状況に対するレスポンスに大西と樗牛の相違が看取できる。

明治維新以来「富国強兵」を目指してきた明治国家は一方で帝国憲法、「教育勅語」を發布し、他方で産業革命を行うことによって、近代国民国家の構築を進めていた。1890年代半ば、日清戦争の勝利で最初の植民地を獲得し、ナショナリズムの高揚期を迎えた。しかしこの過程は、内村鑑三不敬事件（1891）や「教育と宗教の衝突」論争（1893）に象徴されるように、国家にとっての「他者」に対する抑圧を伴ったものでもある。日清戦争を経た後、出来上がった官僚制的な国家機構を前にして疎外を実感した世代から「煩悶青年」がたくさん現れ（1903年に自殺した藤村操はその端的な例）、資本主義体制のいわば影の部分も「社会問題」として露呈し始めた。

大西と樗牛は二人とも日露戦争以前に逝去したが、大西は「忠君愛国」のイデオロギーを組み込んだ井上哲次郎の『勅語衍義』（1891）を厳しく批判し、井上らのキリスト教攻

28 大西の批評論の後に展開されていった高山樗牛、姉崎正治、森鷗外、金子筑水、桑木巖翼らの言論を考察し「文明批評」・「文化主義」の諸相を解明する労作として林正子『博文館「太陽」と近代日本文明論』（勉誠出版、2017年）がある。

29 島崎藤村『新片町より』左久良書房、1909年、183-184頁

撃に対して敢然と反論を加えた。日清戦争後は高まった国家主義を相対化し、穂積八束（1860-1912）による「祖先教」の主張を論難した。さらに当時の社会主義に関する否定的な評価に対して、『六合雑誌』で「社会主義の必要」（1896）を発表し社会主義への支持を表明した。それと対照的に、樗牛は一時期井上哲次郎の国家主義的な言論に追随していたが<sup>30</sup>、その「日本主義」の内容的な貧弱は大西から指摘された<sup>31</sup>。社会主義の意味を貶め「社会問題」からも目を背けたことも、彼の批評観における「社会」の不在、リアリティの欠如を物語っている。これは後に「美的生活」や「本能」を謳歌していた時期においてもさほど変わらない。

すでに樗牛に見られたような内面的自我の肥大化は日露戦争後一層顕著になり、それと並行したのは丸山真男のいう「アパシィ」（政治的無関心）の蔓延だ<sup>32</sup>。ナショナリズムの下火や上昇ルートの固定化によるこの非政治化は「大正知識人」の性格も少なからず規定していた。

ただし、「文明批評」の言説をトータルな視点で見ると、必ずしも「社会」への目線が欠落しているとは限らない。というのは、飯田泰三の整理に従えば、「文明批評家」という範疇の成立の前提的存在として、樗牛が重きを置いた文芸批評を軸とする文学系列のほかに、「社会認識における実証的对象化」を特徴とする社会学系列と、「哲学」と「社会」批評を架橋しようとする哲学系列があるからだ<sup>33</sup>。社会学系列の代表人物で「文明批評家」という語を自覚的に用いた長谷川如是閑（1875-1969）は福澤諭吉（1835-1901）、陸羯南（1857-1907）、三宅雪嶺（1860-1945）、徳富蘇峰（1863-1957）といった、アカデミズムに所属しないジャーナリストの系譜を受け継ごうとしつつも、国家主義と異なる見地から「社会」に強烈な関心を寄せている<sup>34</sup>。それに文学系列に数えられる人物は実は哲学系列と重なり合う者が多く、例えば田中王堂（1868-1932）、土田杏村（1891-1934）は文芸批評に関わると同時に「思想」と「実生活」の乖離を問題視し、両者の統合を求めた<sup>35</sup>。「評論」というスタイルそのものへの注目もこの文脈において位置づけられる<sup>36</sup>。上記の三つの系列に即して見れば、これから考察する戸坂潤は哲学系列に属しながら社会学系列に近い位

---

30 高山と井上の関係は前田愛「井上哲次郎と高山樗牛」（『幻景の明治』所収、岩波書店、2006年）を参照。

31 大西祝「日本主義の綱目」『六合雑誌』198号、1897年6月。

32 丸山真男『忠誠と反逆』筑摩書房、1992年、88-89頁。

33 飯田泰三『大正知識人の思想風景』法政大学出版局、2017年、62-73頁。飯田は同書でこのような「文明批評」言説の形成の社会的条件として、評論ジャーナリズムの変化、「文学青年」の大量登場、アカデミーの変化を挙げる（73-78頁）。

34 同上、65-67頁。

35 同上、70-71頁。

36 田中王堂「近世文壇に於ける評論の価値」、『書生より街頭へ』広文堂、1912年、1-14頁。



置にいた者と言える。もっとも、「社会」を捉える理論的視座の形成は、マルクス主義をはじめとする社会科学の受容と不可分な関係にある。

要するに1890年代後半から大衆社会が成立した1920年代までの時期において、「文明批評」の視座から理論と現実の交渉・媒介を対象化する動きは確かに生じた。それは当時の人格主義や教養主義の思潮と相まって「文化」への関心に繋がる。次の世代にあたる戸坂潤の「クリティシズム」はまさに「文明批評」・「文化主義」の課題を批判的に継承したところから出発する。大西がある程度意識していた、出版市場における批評の屈折は戸坂の批評論においてより自覚された形でクローズアップされ、「アカデミズムとジャーナリズム」という問題機制でさらに概念化、精緻化されていく。

### 3. 戸坂潤の批評論(1)——「文芸批評」から「科学的批評」へ

#### 3-1. ジャーナリズム論から批評論へ

マルクス主義を受容し、早くもイデオロギー論に取り掛かる戸坂潤は、イデオロギーとしてのジャーナリズムを切口に、批評の問題へ接近していく。実際1920年代後半から1930年代にかけて、ジャーナリズムの拡張およびそれ自体の対象化が顕著になっていた<sup>37</sup>。戸坂に従えば、アカデミーが教壇、非日常、真理、術学、純粋科学に関わるのに対して、ジャーナリズムは日常性・社会性・外部性、卑俗性を特徴としており、それを運んでいる「常識」は「時に浅薄な又は幼稚な知識を意味し、又時に人間の健全な良識を意味する」という両義的なものである<sup>38</sup>。

アカデミズムとジャーナリズムの対立と連関は戸坂における重要なテーマである。この対概念はまた実証性と批評性、肯定と否定、芸術的価値と政治的価値といった一連のタームに置き換えられ、戸坂の批評論の骨格をなしている。それが主題化される歴史的契機に、「大学の普及」による総合雑誌「公共圏」の形成、「大学の転落」による「理論ジャーナリズム」の確立が挙げられる<sup>39</sup>。「常識」に対する戸坂の関心も、三木清主導のアリストテレス『形而上学』読書会におけるアカデミズムの地盤喪失という問題意識に連なると言われる<sup>40</sup>。ただし前に論じたように、民衆・社会・日常生活に注目する明治後期以来の「文

37 大澤聡『批評メディア論』岩波書店、2015年、9-42頁。

38 戸坂潤「アカデミーとジャーナリズム」『思想』111号、1931年6月。『現代のための哲学』（大畑書店、1933）、『現代哲学講話』（白揚社、1934）所収。『戸坂潤全集』（以下、『全集』と略称）第三巻、勁草書房、1966年、148頁。以下、全集からの引用文は（3・148）というように、巻数・頁数のみ記す。

39 高木喜孝「戸坂潤の啓蒙論とジャーナリズム」『跡見学園女子大学紀要』16、1983年、141-158頁。「理論ジャーナリズム」は戸坂本人の言葉である。

40 後藤嘉弘「戸坂潤の常識概念と、三木清」『図書館情報メディア研究』第5巻2号57-87頁。

明批評」の動きも考慮に入れるべきだろう。桑木巖翼の「常識と哲学」（『時代と哲学』隆文館、1904年）、田中王堂の『書齋より街頭へ』（広文堂、1912年）および金子筑水の「哲学の民衆化」（『生活と文化』南北社、1919年）などはそうした問題関心を共有していたと言ってよい。

ところで、ジャーナリズムは戸坂によってアカデミズムと同様にイデオロギー的存在と捉えられる以上、その「下部構造」が自ずと問題になる。大学という政治的制度に依拠するアカデミーと異なり、ジャーナリズムは出版資本という経済的実体を物質的基盤としている<sup>41</sup>。そこに「近代ジャーナリズムは全く出版資本の所産なのであった」（3・151）という峻厳な事実が横たわっている。「或る種のイデオロギー的作用の生産・分配・消費」を行おうとするジャーナリズムは「貨幣に換算出来るような物質的な資本の蓄積」を追求する資本と不可避的に衝突し、やがて資本の強力な働きで扱じれてしまう（3・151）。その状態について戸坂はこのように述べている。

一方に於てジャーナリズムはそれが本来持っていた無定見性の可能性を愈々促進され、極端に皮相的なものとなる、それは尖端的なものとなることによって商品価値を生じる。と共に他方に於て、商品ジャーナリズムはそれが本来持っていた当面性・実際性を或る点に於て限界され、もはや充分に真に当面的・実際的な社会的機能を果たせなくなる。（3・151）

ジャーナリズムの当面性・実際性は端的な商品化によって骨抜きにされている。こうした畸形的な性格についての戸坂の指摘は、「ジャーナリズムの本質をその批判性・革命性——『対立的社会意識』——に置いた」という「或る評論家」の見解を踏まえたものだ（3・152）。「或る評論家」とは「新聞」を社会の集会的対立意識の上に構成されるものと捉える長谷川如是閑のことを指していると考えられる<sup>42</sup>。ともに唯物論研究会の創立に立ち会った当初、戸坂と如是閑は観念と実践の結合や知識の大衆化という問題意識を共有していただろう。「研究会」自体はそういった問題意識による集団的实践とも言われる<sup>43</sup>。

ではジャーナリズムは批評とどのように結び付けられるだろうか。「批評の問題」(1932)<sup>44</sup>では批評がジャーナリズム論の視点から論じられる。繰り返しになるが、戸坂はジャーナリズムを、新聞・雑誌・キネマ・ラジオという諸物体を生産し、またそれらによって表現

---

41 前掲戸坂「アカデミーとジャーナリズム」、『全集』3、151頁。

42 如是閑と戸坂の新聞論については吉見俊哉「三〇年代日本における唯物論的メディア論の射程」（『大航海』25、1998年、147-159頁）を参照。

43 新倉貴仁「中間の思考——文化社会学の学説史的考察」、吉見俊哉編著『文化社会学の条件』日本図書センター、2014年。

44 戸坂潤「批評の問題——イデオロギー論によるジャーナリズムの一問題」『思想』123号、1932年7月。『全集』3、154-166頁。

される「社会的意識の現代に於ける一形態・イデオロギー」(3・154)と規定している。この規定の下、「批評」概念が導入される。

文化財生産関係(中略)に現われる一過程を云い現わす処の一つの根本契機、それが最も一般的な意味に於ける批評(批評性)でなければならぬ。そして今大事なことは、この批評性が、恰もイデオロギー形態の一契機としてのジャーナリズム的契機に該当する処の一過程だという点である。実際、新聞や雑誌はその材料や編集機構から云って、常に批評的——又評論的——性格を失うことが出来ない。(3・155)

つまり「広義に於ける批評」は「文化生産関係に於けるジャーナリズムの契機」である(3・157)。ところが、現にジャーナリズムは資本によってデフォルメされている以上、批評も資本からの侵食を免れない。これは大西祝が「批評論」を発表した1880年代後半においてすでに垣間見え、1920-30年代の言論空間で関心を集めたトピックである。例えば杉山平助(1895-1946)の「批評の敗北」(1934)では「批評家が出版業者の手によって徹底的に叩きつけられる」という批評の苦境が記されている<sup>45</sup>。ともかく、ジャーナリズム本来の機能、その批評性を回復させることは戸坂にとって喫緊の課題となっている。

### 3-2. 狭義の文芸批評に対する批判

イデオロギー論の見地から批評をより広い意味において把握することは取りも直さず、批評を文壇の専有物として狭隘化させる見方に異を唱えることである。これは戸坂の批評論の一特徴と言えるが、土田杏村の観察によれば、第一次世界大戦後、文明批評が社会問題を対象とする傾向はすでに発生した<sup>46</sup>。

1934年の評論において戸坂は「唯一の批評は所謂文芸批評につき、とでも『文芸評論家』は考えているらしい<sup>47</sup>と指摘している。ここで俎上に載せられるのは「批評=文芸批評」という観点である。それに囚われる「文芸評論家」たちの営む批評は、戸坂によれば、実は広大な内容をもつ批評の一部分でしかない。「彼等は批評という巨象の特に円滑な皮膚の部分だけを『文学的』に撫でまわして」、そこから「文芸批評」としての批評という観念を得る<sup>48</sup>。この自己完結的な「文芸批評」において、批評はいつまでも「文学」の内部で空転し、結局あらゆる物事を「文学的」に扱うことになる<sup>49</sup>。

こうした「文芸批評」の優位の背後に「全生活を挙げてそのまま文学と意識的に一致せ

45 杉山平助『文芸従軍記』改造社、1934年、20頁。

46 土田杏村「文明批評と社会思想」、『日本支那現代思想研究』所収、第一書房、1926年、181-182頁。

47 戸坂潤「反動期に於ける文学と哲学」『文芸』、1934年。戸坂潤『日本イデオロギー論』岩波書店、1977年、269-270頁。

48 同上、271頁。

49 同上、271頁。

しめる」「文学主義」が潜んでいる<sup>50</sup>。「文学主義」に対する戸坂の批判は直接的には同時期の「文芸復興」ブームに向けられる。1933年から盧溝橋事件の起きた1937年までの「文芸復興」は「科学や生産技術を含めての文芸乃至文化」ではなく「単に文学としての『文芸』」の復興を唱え、「科学」を打倒すべき旧権威として最初から捨象してしまった<sup>51</sup>。柄谷行人の言い方を借りれば、戸坂における「科学」は、単なる自然科学よりも、決して「文芸」によって内面化されえない「外部」を指し示している<sup>52</sup>。

さらに、文芸批評は作家やその作品に関する批評だけではないように、「文学」も作家やその作品に限定されるものではなく、文学的現実はずねに社会的・思想的現実との密接な関係にある、と戸坂は主張する<sup>53</sup>。したがって、社会、道徳、経済、科学や哲学に関する批評と「組織的に結びついて初めて、文芸批評も文芸批評の意義を受け取ることが出来るのだ」（4・22）。

ところで、このような総合的な批評を担う主体は誰なのか。戸坂は作家による批評、専門的批評および一般読者による批評という三つの批評を挙げて、来るべき批評の主体を「一般読者」——それは戸坂にとって「プロレタリア大衆」をも意味するが——に求める。つまり、作品から率直に印象を受け取り、自分の常識との結節点を追跡する一般読者による批評は「普遍的な批評の体系」、「総合的で統一的な批評」（4・24）に据えている。こうした批評観の下、文芸批評は批評一般の一部分に過ぎず、批評家はある意味でジャーナリストである<sup>54</sup>。

それではこの普遍的総合的批評はどのような構造を持つのだろうか。

### 3-3. 「科学的批評」の構造

結論を先に述べると、戸坂は批評を「科学的批評」と捉え直すことによってそのアクチュアリティを取り戻そうとする。その内実を明らかにするために、再びアカデミズムとジャーナリズムの緊張関係を確認しよう。

戸坂によれば、アカデミズムは専門的・分科的であるのに対して、ジャーナリズムは常識（日常）的・総合的・エンサイクロペディックだから、世界観的統一つまり哲学を有する<sup>55</sup>。そして実証性をもつ前者と批評性をもつ後者はそれぞれ科学と文芸、言い換えれば

---

50 同上、273頁。

51 同上、275頁。

52 前掲柄谷編著、151頁。

53 戸坂潤「局外批評論」、1935年10月。『思想としての文学』（三笠書房、1936年）所収。『全集』4、21頁。ちなみに、その前に発表された大宅壮一の「局外文芸批評家論」（1935年8月）において戸坂が「局外批評家」の一人に数えられている。

54 同上、24頁。

55 『全集』3、156頁。

認識と表現・理解に対応している。そうすると「科学」と「批評」は対立しているはずで、「科学的批評」という言い方が矛盾しているように見える。だが戸坂の見方では、専門的分科を重んじる科学も、各分科の範疇体系の共軛性つまり哲学的な総合を仮定し、一般の事物の理論的批判すなわち評論に到達しなくては成立しない<sup>56</sup>。科学は最終的には批評性に繋がる哲学的契機を内包している。こうして科学、哲学、批評は関連付けられていく。

実証性と批評性の併存は科学のみならず、文芸に関しても言える<sup>57</sup>。戸坂は続いて「制作」と「鑑賞」という対概念を持ち出し、文芸における実証性の契機は制作で、批評性の契機は鑑賞だという<sup>58</sup>。鑑賞・批評は単に直接な感受ではなく、知識＝認識の整理を経た感受機関を通して形成する感受——その意味でまた科学性を帯びている——なのだが、一方で「制作」とは「認識」ではなく「一種の直接的感動的な実践」(3・158-159)である。つまり認識作用を介するかしないかは両者を区別するポイントとなる。

ところで、「制作」と「鑑賞」・「批評」は対立しつつも、ある内的連関をもって相互規定している。

現実的な制作の平面に於ては、批評はいつも制作の後を追いかけて行く消極的な寄生物と見える。之に反して可能的な制作の平面に於ては却って、制作がいつも批評に追隨して行く形を取るのである。(中略) 可能的制作力とは併し、要するにまだ顕わに実現されていない処の潜在的制作力——制作のそういう一種の潜勢力——であるから、歴史的時間の系列から云えば、場合に依じて却って夫は、将来の現実的制作力を約束することが出来る。(3・160)

戸坂は制作を「現実的な制作」と「可能的な制作」に分けて、前者では批評が制作についていくが、後者ではかえって制作が批評に追隨する。逆に言えば、批評によって開示されるのは可能的な制作という次元である。未来の現実的制作力は批評の潜在的制作力によって担保される。その際、肯定（発見・促進・要望）と否定（黙殺・拒否・警告）両面から、制作の動機は批評によって具体化される<sup>59</sup>。

批評の肯定的な面と否定的な面は「評価」という（批評の）「質的特有性」を提示する。というのは、評価としての批評・鑑賞は「価値の対立の間に判決を与える一つの機能」であり「客観的な価値標尺を基準に」するものだから(3・162)。そして「評価」はいつも客観的な価値評価である以上、「科学的批評」となる<sup>60</sup>。そこに、ジャーナリズム＝批評性＝批評・鑑賞とアカデミズム＝実証性＝制作の対立を表した、文芸の政治的価値と芸術

56 同上、157-158頁。

57 同上、158頁。

58 同上、158頁。

59 同上、161頁。

60 同上、162頁。



的価値の対立問題<sup>61</sup>があるにせよ、観念ではなく実践としての統一が要求される。つまり科学的批評は「第一に(可能的な)制作・芸術的实践として、そして第二にそれを通して(現実的な)政治的实践として、初めて存在する」(3・165-166)。

戸坂にとって、科学的批評はジャーナリズムとアカデミズムの統一を目指す「階級的な文化闘争」のための「一方法形態」・「普遍的な一原理」(3・166)以外の何物でもない。批評家としてのジャーナリストに期待されるのは科学的批評の遂行であって、それこそ哲学の責任なのだ<sup>62</sup>。言い換えれば、ジャーナリズムと哲学の落ち合うところに批評=批判があり<sup>63</sup>、ジャーナリズムの批評機能の回復は哲学がもともと持っていた日常性・常識性の回復も意味している<sup>64</sup>。

## 4. 戸坂潤の批評論(2)——批評と認識

### 4-1. 認識論としての批評

科学的批評を哲学の責任と考える戸坂はさらに批評=クリティシズムの哲学的意義を認識論的意義、批評自体を認識論の一機能と捉え<sup>65</sup>、認識論のアプローチによって批評を哲学的な問題に接続させようとする。この試みは文学主義的な文芸批評からの脱却と考えられるし、同時に近代日本哲学の代表とされる西田哲学と異なる「哲学」の可能性を示唆している<sup>66</sup>。

戸坂はまず科学=認識、芸術・文学=表現という通説に疑問を投げかけ、芸術を「世界についての芸術的『認識』」と看做すと同時に認識・認識論の観念を芸術まで拡充することは、「哲学の新段階を画する規模のもの」だと説く(3・470-471)。芸術は一種の世界認識とすれば、批評も「認識=認識物の一種の検討」・「認識論的活動」となり、「認識論としてのクリティシズム」というものが成立する(3・471-472)。科学対文芸という二項対立の克服は前述した「科学的批評」の構想と軌を一にしている。

---

61 平林初之輔の「政治的価値と芸術的価値」(1929)に端を発した「芸術的価値論争」は戸坂の念頭にあったと考えられる。

62 『全集』3、166頁。

63 戸坂潤「ジャーナリズムと哲学との交渉」、1934年12月。前掲『思想としての文学』所収。『全集』4、152頁。

64 ハルトゥーニアン著・梅森直之訳『近代による超克』岩波書店、2007年、231-232頁。

65 戸坂潤「クリティシズムと認識論との関係」『認識論とは何か』。『唯物論全書』(三笠書房、1937年10月)所収。『全集』3、468頁。

66 森宏一「戸坂潤のクリティシズム」(『唯物論研究』4、1948年、27-37頁)は形而上学派對認識論派(西田対左右田)という土田杏村の構図を参照し、戸坂の立場を認識論派に属したものと捉える。とはいえ、津田雅夫「『批評』について：西田幾多郎と戸坂潤」(『岐阜大学地域科学部研究報告』28、2011年、1-16頁)が示すように、戸坂の批評は「考える主体」の確立を課題とする以上、西田哲学の「自覚」概念と無関係ではない。



批評は認識論的である以上、哲学上の批判主義に繋がることは想像に難くない。この点について戸坂は主にカント（Immanuel Kant, 1724-1804）の批判主義を取り上げて論じる。大西祝と同様、戸坂もカント的な「批判」の意味を「批評」概念に込めている。

カントの批判主義＝クリティシズムの眼目は人間の主体的な能力いわば理性能力の批判にあり、「実は社会に現存する文化諸領域を組織的に批判検討する」（3・472）ことを目的とする。戸坂の興味を引くのは、批判主義における批評的精神である。

彼の批判主義が（中略）世界概念によって立つものであることは、周知の通りだが、こうした世界への関心は、同時に社会への関心をも意味している。啓蒙という課題に逸早く答えたのも彼であるし、世界市民の観念を明白にしたのも彼である。（中略）彼に於ても、諸文化諸世界の組織的連関に関する興味が一個のアンシクロペディストを産み出しているのであるが、処がそのために欠くことの出来なかったのが文人批判的な社会的関心である。文化への真に切実な関心は社会に実在する文化への関心であった筈だ。（中略）カントに於て可なり高く評価されて然るべきものは、そのクリティシズムの精神だろう。（3・473）

戸坂はとりわけカントにおける「社会に実在する文化への関心」を重視している。そのため、弱体化した批判主義としての新カント派哲学に関してはその限界を見極めたにもかかわらず、それが「文化批評の哲学としては、ある程度の文明批評的な仕事をなし遂げたという事実」（3・474）を認めている。この事実はさらに「文化諸世界の組織的な原則的な批評体系が認識論だということ、クリティシズムが認識論に帰するという一事実」（3・474）を示している。戸坂が世界概念に基づくカントの批判主義を持ち出したのは偶然ではない。後述するが、これは批評と普遍性を関係づけることに関わっている。

#### 4-2. 批評と言語

既述したように、批評は単なる印象よりも知識＝認識を通過した感受である。この認識と感受の間に言語作用が介在している。戸坂における認識論としての批評の根本構造を解明するには、言語論の分析は不可欠だ。

まずは「アカデミズム対ジャーナリズム」という構図を想起されたい。重複を厭わず整理すると、アカデミズムは「実証（Position）の契機」を内に含めるのに対して、ジャーナリズムは批評性を契機とし、現実行動性と言語論理性を特色としている<sup>67</sup>。現実行動性はジャーナリズムの常識的・日常的な側面から来ている<sup>68</sup>。一方でジャーナリズムはもともと「凡ゆる部門的な分科的な事物が言葉という市場をめざして集る場合の共通な場

67 『全集』3、156頁。

68 同上、156頁。

処（Topos）」における「話題」（Topik）に参入するものだから言語性を要している（3・156）。

実は、こういった現実行動性と言語論理性は表裏一体である。というのは、言語・論理は「区別の・分割の・即ち又否定の・道具または原理」であり、現実行動性は「時間の現在性ならばその消滅の・事実の現実性ならばその変化の・行為の活動性ならば同化の・実践の政治性ならば対抗の・生活の社会性ならば対立の・要するに之も亦否定の・過程」であって、つまり「両者は否定の、対立の、原理によって一貫されて」おり、「優れて弁証法的なもの」だからである（3・156-157）。ここでも長谷川如是閑による（と思われる）「ジャーナリズムが対立意識の表現だという説」（3・157）が触れられている。

「弁証法的なもの」として「否定の原理」に貫通されているという、現実行動性と言語論理性の共通点は批評にも見られる。批評性そのものは「恰もこういう否定の原理に立つ優れて弁証法的なもの」（3・157）にはかならない。

批評も「否定」を原理とする以上、言語との間に構造的類似が看取される。戸坂にとって言語は批評の根源的な事態と言ってよい。両者の関係がこのように論じられている。

クリティシズムについてまず第一に気づく点は、それが言葉によって表現されるという周知の特色だ。（中略）一つの感覚的印象についての概念的・悟性的・反省が言葉によって云い現わされるという現象が、あらゆる場合を通じてのクリティシズムの事態である。批判は（中略）それは芸術作品が与える感性的印象をば、言葉の世界へ翻訳することによって、別の次元へ、別の秩序界へ、持って行く。作品の第一次的性質に対してクリティシズムが第二次性質である所以だ。処が、この第二次性質が同時にクリティシズムという世界の独立性と独自性を産むのである。そこで文芸批評は、往々文芸作品の従者のように見做されると同時に、文芸作品の裁判官や教師とも見られる、というわけだ。（3・475）

要するに、印象を言葉へ翻訳する営為は批評である。感性的な印象は反省という認識論的操作を介してもう一つの次元・秩序界に運ばれる。それはすでに述べた「可能的な制作の平面」と重なるものだろう。そこに批評的な空間が確保される。創作と批評のギャップを無化する「創作的批評」ではなく、創作と否定的な距離を保つ批評である。作品に対して二次的である批評はかえって、「裁判官」・「教師」として作品から独立した審級を形成させる。この把握は同時代の超越を批評に求め、「名作を誘引する」力と「将来を指揮する」力をそこに看取する大西祝の批評論に通じると考えられる。なお、印象から言葉への変換を「翻訳」と理解する点では、事物の言語から人間の言語への「翻訳」を論じるベンヤミンの言語論・翻訳論を彷彿させるとされる<sup>69</sup>。

---

69 ヴァルター・ベンヤミン「言語一般と人間の言語について」、浅井健次郎編訳・久保哲司訳『ベンヤミン・コレクション1』筑摩書房、2016年、7-36頁。

戸坂にとって言葉はあらゆる人間活動に随伴する「最も普遍的な表現形式」(3・476)であり、批評も一種の言語的活動だから、言葉の次元へのアクセスなしには批評が成り立たない。ただしそれは印象の放棄を意味してはいない。経験の現場性を無視する批評は観念の戯れに堕ちてしまう。批評が美学＝感性理論に結びつくのも、印象を出発点としているからである<sup>70</sup>。

#### 4-3. 媒介としての否定と文化的普遍性

批評の独自性を保証するものとして「否定」の作用を強調する戸坂はさらに、「否定」を「媒介のための否定」と捉え、「諸文化作品の間を、作品と作者との間を、諸文化領域の間を、相互に媒介する」ことは批評の機能だという(3・478)。つまり批評は前述したように印象と言葉を媒介するだけでなく、言葉によって織り成された各々の文化的表象をも媒介する。批評の媒介機能は戸坂によって「文化運搬性」と呼ばれ、普遍性に接続するものとされる。

クリティシズムは常識として、個々一定の文化作品を以て自分の自然な母胎とするにも拘らず、それとの間隙と距離と対立とを発条として、この母胎を離れて一つの独自の秩序界を展開する。(中略)文化運搬性ということが、クリティシズムの例の媒介機能の第一の現われであると云える。個々の文化作品の特殊性に基く固着と膠着とを剥離して、文化的普遍性の軌道に乗せることが、クリティシズムの否定作用と考えられたものだ。(3・479)

このような否定・媒介の構造は戸坂の翻訳論と文化論の骨格をなしている。「文化作品」と「独自の秩序界」の距離は言語世界内部の翻訳を可能にし、批評は印象から言葉への翻訳のみならず、「諸文化内部に於ける一切の細胞間」(3・481)の翻訳でもある。こうしたインターディシプリナリーな批評によってこそ、「国語」の特殊性に対する「世界文学」の普遍性が出現する。翻訳可能性を担保するこの普遍性は、端的に言えば統整的理念として要請され、先に触れたカントの世界概念と相通じるものだ。そこにナショナリズムにインターナショナリズムの理念を対置する戸坂の、マルクス主義者としての姿勢が窺える。批評と文化の関係を論じるにあたって「文化」と「文化意識」を区別するのも「文化のイデー」を抽出するためである。

諸文化から文化意識が指導的イデーとして抽出され、それが主体化され主題化されることは、諸文化に沿い諸文化に即しながらクリティシズムの組織が横断的に結成されるということに、正確に該当するわけである。で、文化意識とは、その内容から云えばクリティシズムであるということになる。(3・487)

70 『全集』3、483-484頁。

「指導的イデー」として抽出された文化意識はジャンルを横断する批評として主体化される。それが文化そのものを社会的な力に転化させていく<sup>71</sup>。したがって批評はまた「多衆」の組織化、「大衆」＝「主体」形成論として<sup>72</sup>、対自的な民衆の出現を呼び掛ける。

文化・文化意識に対する戸坂の理論的な関心は、実は第一次世界大戦後「文化の意識に立脚して文明批評を試みた」桑木巖翼や土田杏村のような文化哲学者の言説を踏まえたものだ（3・486）。桑木、杏村らの「文化」概念に関しては、ドイツ観念論の系統に属し「文化主義」の枠内に止まる「小市民的インテリゲンチヤの世界観の支柱類」であると直ちに肯定しないものの、「文明批評」という課題自体の意義を認め、「現実の諸文化の批評」を行う「文化批評・文明批判の類」は「文化の理論の最も活動的な内容」、「認識論の季節的な重大使命」ないし「クリティシズムの活動」であるという（3・486-487）。戸坂の批評論は「文明批評」・「文化主義」の思潮を止揚したものと言えよう。

## おわりに

以上、戸坂の批評論に重きを置き、大西祝に始まり「文明批評」・「文化主義」を経た批評論の展開を考察してきた。近代の「批評」は商業出版・活字メディアを存立の条件として、不可避的にイデオロギー的存在となった。しかし戸坂は現実の変革を志向する潜勢力を批評に読み込もうとする。批評史から見ると、彼による批評の実践は「局外批評」として、「文芸批評」にアクチュアリティを注入する試みである。それはもっぱら文学的に享受されてきた批評を認識論の見地から論じることによって、観念の独走に歯止めをかけるものだ。一方で哲学史から言えば、批評・ジャーナリズムを哲学的考察の範囲に入れることは、「日常性」を顧みない観念論哲学への批判と考えられる。そこにおいて批評としての哲学は現実への感受性に基づきつつ否定という媒介によって文化的普遍性を目指す弁証法的な運動になる。

キーワード 批評、大西祝、戸坂潤、クリティシズム、ジャーナリズム、認識論

(GUO Chiyang)

---

71 同上、485頁。

72 前掲森論文と吉田傑俊『「京都学派」の哲学』（大月書店、2011年、165頁）を参照。